

今月の論点

防衛など三つの主題

ソ連軍のアフガニスタン侵攻以来、「防衛」をめぐる論議がさかんである。今月の総合雑誌をみても、『世界』が「軍拡時代を憂う」という標題で、幾つかの論文を特集し、『中央公論』も「180年代防衛論の前提を問う」という特集を組んでいる。そのほか幾つかの雑誌に、関連する記事や論説、対談などがみられる。

これらの論文や記事をざっと見渡してみても、私は主題別におよそ三つぐらいのタイプに分類することができるとは思わないかという印象をもった。

第一は、狭い意味における「防衛」を問題にするものである。たとえば、海原治の「日本を守れない、防衛構想」(『中央公論』)はその一例である。海原は、防衛論は具体的・現実的なものでなければならぬという立場から「こ



矢野暢氏

この国が攻められるのか」「戦うのか戦わないのか」「どういう方法で戦うのか」を考えようとしている。海原は、ソ連は「解放戦争」を理由に侵攻して来る可能性がある、それにはたいして有効に戦う方法はあると主張する。しかし、いまの自衛隊や政府の計画では戦えないといっている。

第二は、防衛問題を考える前提になる「国際情勢」の判断を問題にするものである。中嶋實雄の「新しい冷戦」の国際学(『世界』)や阪中友久「国際紛争の構図を読む」(『中央公論』)などは、その例である。中嶋は、米ソ両大国の錯誤によって「新しい冷戦」が生みだされているなかで、中国が意外に冷静な態度をとる、ソ連との関係を改善しようとしているという事実、まず、読者の注意をうながしている。中嶋は、ソ連については、「権力を掌

握した西面政権を、外部」もしくは「内部」の「反革命勢力」から防衛するといった、ソ連側からする大義名分もしくは使命観が存する場合」にかぎって軍事介入という行動に出るのであって、ソ連が無限定的に軍事力を使い、明日

国際情勢などの把握 「防衛」にも多角的論及

にでも平和国家を侵略するといったソ連脅威論は、いって成り立たない、と述べている。

しかし、たしかに中嶋のいうとおりであるならば、日本の防衛問題は、基本的に、これからの日本がどのような権力がもたれるかにかかっているといえることになる。

第三は、「防衛問題」とか、「愛国心」とかといったものを考える土台にならぬものと見られる「国家」とは何かという主題である。内山秀夫の「未完の革命としての戦後民主主義」(『世界』)は、清水幾太郎、志水速雄、栗栖弘臣、榊原英策、盛田昭夫などの議論をマニヤタにのせ、最近のソ連の戦後民主主義批判を批判しているのだが、そのなかで、国家とか、国家が、国家意識とかいったものは、いったいかわわわわわとつて向なのかという問題にふれていく。

>上<

正村 公宏

必要なのではないかという感じがしてならなかった。たとえば、たしかに「防衛」の問題は具体的に考えることが必要であり、観念的な理想論を振りまわしても仕方がない。しかし、あたりまえのことだが、軍事は政治の一環であり、その二つの(重要な)方法のなかから、その議論は、内・外の政治の具体的な考察と結びつかなければならぬ。軍事をタブーにして政治を論ずるのは誤りだが、政治を抽象化しておいて軍事を具体的に考えても、正しい戦略は出てこないと思う。

他方、「我々にとって国家とは何か」といった議論も、それだけ取りたせば、最高に空しいものになる。戦後民主主義は日本国民から国家意識を失わせてしまったと嘆く人々も、その種の議論に「反動」のにおいを嗅ぐかきとって攻撃する人々も、実は、何も有効に問題にしていないという結果に終わる可能性がある。実は、具体的にどのような体制を日本人が選択しようとしているのか、最大の問題なのである。

具体的政策の分析

現在の国際情勢をできるだけ正確に読もうとしたら、それを動かしている諸力を具体的に分析しなければならぬ。具体的に分析するといふことは、もちろん、事実を並べればできるといふものではないが、あくまでも事実に基づくものでなければならぬ。しかし、その場合の事実とは何だろうか。「現在の国際情勢を動かしている諸力」を見つめようとするば、いかにいかに、主要な国々の政策を具体的に把握(はあく)

しなければならない。そうなければ、「アメリカ」とか「西ヨーロッパ」とか「日本」とか「第三世界」とかといった表現そのものがかじょうにおかしいといふことになるのではないか。たとえばアメリカも、いろいろな考え方があり、それが交錯し、ゆれ動き、相互に作用して政策がきまっている。とくに、自由な体制をもっている諸国にはこの観点が必要だろう。

ソ連の分析は不明確

矢野暢の「戦略を失った超大国——心理国家」の理論(『中央公論』)は、直接に国際情勢や防衛問題を論じたものではなく、諸国家の政策形成を分析するフレームワークを問題にしたものであるが、それだけにかえて、右のような観点にたいして一つの有益な接近方法を示唆してくれている。矢野は、伝統的な国家観のなかにある「心理国家」の理論に「心理国家」の理論を対置し、国家意識や対外政策の形成における心理的要素や文化的要素を重視する体系的な方法への模索を示している。

矢野は、東南アジア、アメリカ



るところの結社であり、結社の代表歌人たちである。

わたしは、「未来」「まじる野」「心の花」「詩歌」「塔」など数種の結社の寄題をうけているので、結社の現況は大体わかっているつもりでいた。いまでも

理念を失

厳選主義

なく、どの結社もとうとうたる大衆芸能化の波をかぶって、主張すべき短歌理念を喪失している。しかし、最近、「アララギ」「歩道」を久しぶりに見る機会があった、長嘆息せざるをえなかつ



これらはそれぞれ重要な主題であり、いちいち独立に論ずることができないものはある。しかし、これらのすべてをこの一例示しなかつたものを含めて、読みながら、何かこれらの主題を相互に関連づける横断的で具体的方法が



岡井 隆

歌壇を代表する雑誌に、「短歌研究」「短歌」「短歌現代」がある。いわば、(総合誌)そのものが、(総合誌)そのものを総合しているのか、すこぶるあいまいである。総合しているのではない、おのおの雑誌の寄稿家を、あるかたまりをもって選抜したり、抽出したりしているのではないかとおもわれる。

では、選抜とか抽出の対象となるのはなにかというと、歌壇のからされた部分、水面下の氷山であ

力、ソ連、日本を例示的に分析しているのであるが、興味深いことに、ソ連の分析だけはいささか不明確・不徹底に感じられる。ソ連が情報的に閉鎖されているだけでなく、矢野のいう「理性の前衛的独占に依拠する一種の、理性国家」だからであろうか。矢野は、「豆腐と鉄を並べて配置したら、距離を置いて並べたとしても豆腐は崩れてしまいそうに見える」と述べている。爛熟（らんじゆく）した自由な文明は、どれほど人間の可能性の開花を見いだしたと

しても（あるいは、むしろそのゆえに）、自由を否定する周辺文明あるいは疑似文明のまえには、致命的な弱さをさらけ出すことにならざるをえないということなのだ。致（いた）らうか。（専修大学教授・経済学）

『前衛』を突きぬけた書道

井上有一氏の成果示す作品集

≪≪≪ 手帳

一字書の大作によって、戦後の書の世界に『前衛書道』をも突きぬける新しい感覚を打ちたてた井上有一氏の成果を示す作品集。書道展、太平洋地域巡回日本美術展などの場に移る。それは一九五〇年代の抽象表現主義の隆盛にも呼応した活動だった。五八年、ブリュッセルの「現代美術の半世紀